〔駒沢女子大学　研究紀要　第16号　p .31 ～ 46　2009〕

アーネスト・サトウにとっての日光中禅寺

井　戸　桂　子

Nikko and Ernest Satow, an English Diplomat

Keiko IDO

Ernest Satow, an English diplomat, who lived in Japan from 1862 to1883 as an interpreter and from 1895 to 1900 as Minister Plenipotentiary in Tokyo, fell in love with Nikko and the area of Lake Chuzenji and popularized this sacred and beautiful spot among foreigners in Japan.

After the Meiji Restoration, Ernest Satow travelled to many places in Japan. The Japan Mail in Yokohama published *A Guide Book to Nikko* in 1875 and Murray in London published *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* in 1884, both of which Satow wrote. He visited Nikko and climbed the mountains nearby in order to relax from the worries about his future as a diplomat.

However, after receiving a Knighthood, Satow was pleased to be appointed as Minister Plenipotentiary to Japan. He stayed in his summer house on the shore of Lake Chuzenji and enjoyed a happy social life; he rowed, hiked in the mountains and picked alpine flowers. And occasionally, he brought his children, Eitaro and Hisakichi, on his hikes, and he enjoyed a quiet private life with his family.

Therefore, the Nikko and Chuzennji areas became unforgettable places in Satow's life in Japan.

はじめに
1. 通訳生アーネスト・サトウと日光
　1.1. サトウ19歳の来日まで
　1.2. 国内調査旅行と地誌研究
　1.3. 日光訪問
　1.4. 日光に関する記述
　1.5. 旅行の意味　～ 屈折を癒すもの ～
2. 公使アーネスト・サトウ卿と中禅寺
　2.1. 迂回の後の再来日
　2.2. 中禅寺湖畔の別荘
　2.3. 社交と散歩
　2.4. 英国紳士として、父として
おわりに　～ 帰国後 ～

はじめに

日光東照宮周辺は現在世界遺産に登録され、内外からの多くの観光客で賑っているが、外国人の訪問は明治期にさかのぼる。

日光は明治時代の初めには、徳川の聖地ゆえに一時期衰微し、神仏分離のあおりを受け混乱した。しかし明治３年の英国公使パークス夫妻の東照宮来訪を端緒として、外国人も訪れるようになったことから発展が始まった。その発展の時期は、大きく二つに分けられ、最初は明治30年代のことである。東照宮近辺を中心とした「山内」を、多くの外国からの旅行者や在京の外国人たちが訪れた。さらに、山内の賑わいを喧騒と感じた一部の外国人たちは、中禅寺坂を登り､「中禅寺湖畔」での生活を望むようになる。これが次の発展期となり、大正の中頃までに坂道の拡張や交番、郵便電信等の施設が整ったので、中禅寺湖畔での外交団の別荘生活が始まった。

こうした在京外国人たちの動きを先導したのが、アーネスト・サトウであった。

幕末明治の英国外交官として、アーネスト・サトウは著名である。長期に亘る滞日、幕末維新の当事者あるいは現場証人としての体験、優れた日本語能力、数多くの論文と著書、一度離任して再度公使として赴任した外交官としての実績。そして日本の家族のこと。彼の日本での業績と心情を全てたどり検証するのは、到底一論文には収まりきらない。

本稿では、彼と日光の関係に焦点を当てることとしたい。若い時の日光との出会いや、公使としての中禅寺湖畔の別荘生活を検討することにより、日光と中禅寺が、あるときは彼の心の屈折を癒す機会を提供し、あるときは友人や家族とのかけがえのない時間を与えたことを示したい。また、日光がその後の人生にどのような意味があったかを考察したい。

なお、中禅寺湖近辺の正式名称は二荒山神社中宮祠に由来する「中宮祠」であるが、本稿ではサトウも“Chuzenji”と書いているので、通称の「中禅寺」と記す。

まず、通訳生として来日するに至った経緯について検討する。ロンドンの大学生を日本へと駆り立てたものは何であったのか、そこから書き始めたい。なぜなら、これは結局一生、彼の心の澱のようなものとなったからである。[注1)]

1. 通訳生アーネスト・サトウと日光

1.1. サトウ19歳の来日まで

アーネスト・サトウは1843年ロンドンの北東部に生まれる。父デーヴィッドはドイツ系スウェーデン人で1846年に英国に帰化し、イギリス人の妻マーガレットとの間に、男女11名の子に恵まれた。アーネストは三男である。金融業を営み、子弟に家庭教師をつけ夏に海岸へ遊びに行く余裕はあったが、兄弟の中で大学へ進学したのはアーネスト一人である。両親は英国国教徒ではなくルーテル派であり、宗教には厳格であった。そして兄弟の中で最も才覚のあるアーネストを、オックスフォードよりは宗教的に寛容なケンブリッジに進ませ、階級社会を生きる術を与えたかったようである。しかし宗教的差別が根強い当時の高等教育制度では、たとえケンブリッジであっても、中流階級出身の非国教徒の一青年には、入学できても学位が取得できる保証はなかった。非国教徒や女性がこれらの古い大学への入学を公然と許されるようになるには、1871年の大学宗教審査法により宗教上の制約が撤廃されるのを待たねばならなかった。そこでアーネストは、ロンドンの高等教育機関として1820年代に創立され、宗教を問わないユニヴァーシティ・カレッジに、16歳で入学した。優秀な成績を収め二年間で卒業する。

この在学中に人生を決定する出来事が二つ

あった。一つは書物との出会いで、『1857年―1859年、中国と日本へのエルギン伯爵の物語』およびペリーの『日本遠征記』を読んだことである。前者は1858年に幕府と江戸条約を締結した、インド総督のエルギン伯爵に同行したローレンス・オリファントが著し、「幸福な島国[注2)]」である日本を、色彩の入った挿絵付きで紹介した豪華な本である。当時評判となっており、３歳年長の兄エドワードが図書館で借りてきた。この本によって兄弟二人は東洋への憧憬を抱いた。二人は結局東洋に赴くこととなったが、エドワードはのちに1865年上海で病死した。

もう一つは、サトウを実際に日本へと向かわせた直接的な要因であるが、1861年６月、イギリス外務省は中国と日本での通訳生の募集を行い、ユニヴァーシティ・カレッジに３名を割り当ててきたのである。志願者の年齢制限が1861年７月1日現在で18歳から24歳であったから、1843年６月30日生まれで18歳のサトウは文字通り最年少であったが、両親を説得し首席で合格を果たした。８月20日、日本の領事部門に所属する通訳生として任命されたあと、ユニヴァーシティ・カレッジの最終試験を終え、11月４日ササンプトンから極東への船客となった。

この18歳の青年は、本音としてはどのような思いで日本行を選んだのであろうか。一言でいえば、イギリスからの脱出である。しかしそれは同時に、イギリスをいつまでも引きずらなくてはならない青年の、心の屈折の始まりでもあった。

サトウは、幼少期から高校まで非国教徒としての厳格な教育を受ける一方、イギリスの本流からは宗教的な差別を受けざるを得ない現実を目の当たりにしていた。また社会的には中流階級で教育熱心な両親からの期待を背負う一方、階級社会の中ではケンブリッジやオックスフォードへ進むことは望めなかった。家庭や社会に対するこうした彼の反発がイギリスを脱出したいと望ませ、サトウを日本へと向かわせたことは確かであろう。しかし、彼の選んだ職業は、通訳生という「領事部門」の仕事である。この部門は外務省の在外勤務の中でも「外交部門」に比べればエリートではなく、仕事も給与体系も違う。そのことが、その後彼にストレスを与えることになる。

1862（文久２）年、数か月の中国滞在を経て、９月6日、横浜港に降り立った。19歳の通訳生が日本に降り立った日は、青空に恵まれ美しかった。「それはまさに日本の特徴である輝かしい日々の一日であった。江戸湾に沿って進んでいくと世界中にこれに勝る景色はないと思われた。[注3)]」と、サトウは記した。素直な心の高揚が感じられる。

1.2.　国内調査旅行と地誌研究

日本到着後サトウは、外交官という任務と特権から幕末維新の各地を飛び回った。その中には1863（文久３）年８月の薩英交渉も、1864（元治１）年８月の四カ国連合艦隊下関遠征への同行も、開港交渉のための箱館や兵庫出張も、政治情報収集の長崎・鹿児島・宇和島・高知出張も、もちろん大阪・京都での将軍並びに天皇謁見もあった。しかしこの華々しい東奔西走は、通訳生として、あるいは昇格してから通訳書記官として、パークス公使他への同行任務であった。彼の地誌研究につながる日本国内探索旅行は、当然のことながら、明治に入って世が落ち着いてからのこととなる。

1870（明治３）年11月、サトウはおよそ一年半の第一回の賜暇から帰任する。そして翌1871（明治４）年から、日本各地を巡り、各地での見聞記録を日記だけでなく出来るだけ紀行文に残すことを開始する。８月に箱根・熱海・江の島を旅行し、1872（明治５）年の『ジャパン・

ウィークリー・メイル紙』３月2日号から16日号にかけて旅行記として発表した。続く1872（明治５）年１月には、甲州街道および富士登山入口を探索して、同じく『ジャパン・ウィークリー・メイル紙』の２月24日号に掲載した。ところで日記によれば、「インクも凍ってしまった」厳寒の富士吉田では、「登頂の可能性」を村の役人や地元の人々にだれかれとなく聞いたが、「皆一様に雪が深すぎて無理だ。[注4)]」と答え、諦めさせられたという。サトウの登山への熱心さと健脚への自信はいかばかりかと感心するし、それはいよいよ同年３月の日光で発揮されることとなるのだが、日光行きは次の項でまとめることにして、さらなる旅行の跡をたどりたい。

1872（明治５）年11月から翌年にかけて大旅行に出かけたのである。海路で伊勢神宮、瀬戸内海、長崎、山口、大阪を巡り、陸路京都に入って名所旧跡を見学して年を越し、翌1873（明治６）年１月中山道に入り、軽井沢経由で妙義山に登り、東京に戻る。帰京後すぐに1873（明治６）年２月から３月にかけて『ジャパン・ウィークリー・メイル紙』に中山道記を５回連載した。同じく1873（明治６）年４月に秩父から甲州に足を伸ばせば、『ジャパン・ウィークリー・メイル紙』５月３日号に多摩川渓谷への訪問記を載せ、11月に丹沢を歩けば、同紙12月13日号に大山参詣記を発表する。[注5)]

このように、サトウは精力的に各地を廻ってはすぐに文を書き、矢継ぎ早に公にしている。その理由は、一つには、当時のイギリス在外公館の基本方針が、現地の地理的条件と政治・経済・社会的状況とを関連して把握することであったからである。このような地誌的な情報収集は、外交の基礎として必須であった。また更には、まだ一般の外国人は移動が制限されており、外交官のサトウらが各地の旅行情報を集め、明文化し、知らしめることが、一般の来日外国人にも役立ったのである。日本政府との交渉の結果「内地旅行規則」が制定され、外交官でない一般の外国人が、「外国人旅行免状」を取得すれば、指定された地域への休暇に出かけられるようになったのは、ようやく1874（明治７）年のことである。ここに至ってサトウが蓄えた情報が、実際に役に立つこととなった。

以上のような動きの中から、1872（明治５）年10月に誕生したのが『日本アジア協会』である。重要メンバーのチェンバレンの言葉によれば、「日本および他のアジア諸国に関する題目について知識の収集と調査」[注6)]を目的としており、東京と横浜に所在した。　このアジア協会の研究会や紀要では、地誌に関する論考が多数発表されている。寄稿者は当時第一級の日本研究者であり、彼らの日本各地の地誌的研究の成果は、やがて1884年発行のサトウとホーズ共著『中部北部日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* に結集していくのである。その発行年はサトウのバンコックへの転勤と同じ年であるから、この書はサトウにとって日本滞在時の地誌研究の集大成といえる。

1.3.　日光訪問

サトウはこうした日本探訪の一環で、日光と奥日光の中禅寺も訪れている。すなわち初めての日光旅行を、富士から戻ってほどなく、1872（明治５）年３月13日から24日にかけて実行した。賜暇で不在中のパークスに代わる代理公使アダムズと挿絵家のワーグマンが同行していた。同行者にはなるべく駕籠や人力車、あるいは馬の用意を心遣いながら、自分は徒歩ということが多い行程であった。

日光の鉢石に入ったのが３月16日で、17日には日帰りで中禅寺湖まで往復した。サトウは、

「雪の深さが１フィート以上もあり歩きにくい」中禅寺坂を上り、初めてみる中禅寺湖を、「絵のようにうつくしい湖で、鬱蒼たる樹木に囲まれた山々がこれを取り囲んでいる」と日記に素直にしたためた。巡礼者向けの休み所で「縁側に腰をおろし、陽光で身体をあたためながら、昼食をすませる。[注7)]」その後三十年近くにわたり縁を結ぶ日光中禅寺との最初の出会いであった。東照宮見学よりもまずは中禅寺に行くというその優先度に驚く。しかも雪の残る早春に、道なき道という感のある急な坂を登っていくのである。28歳という体力のピークを考慮しても、サトウの中禅寺への思い入れがすでに初回の登攀に見て取れる。その理由として、たとえば、賜暇中の父母とのドイツ・スイス旅行での思い出やアルプス山岳を巡ったときの感動も挙げられるし、富士登山を１月に諦めさせられたばかりということもあるが、最大の理由は、サトウの山への執着が目覚め始めていたことではないだろうか。

この日は下山して鈴木方に泊まり、翌日以降は東照宮を見学したり付近の滝を巡ったりして探査する。恐らく、村の代表格の戸長を務めていた鈴木から見せてもらった『日光山志』を調べ、細々とノートに記した。というのは、後述する彼の日光案内書 *A Guide Book to Nikko* に、『日光山志』が「参考」として挙げられているからである。[注8)] 歩き回るだけでなく、書物も参考にしているところが、学者肌の通訳書記官サトウらしい。一行は、東照宮と大猷院の神官に寄進をして３月20日に帰途についた。

サトウはこの日光往復記を、帰京直後に『ジャパン・ウィークリー・メイル紙』に1872（明治5）年３月から４月にかけて４回にわたり連載した。

その後サトウは、通訳書記官としての在日時代、計四回来晃した。前述の1872（明治５）年３月を最初として、第二回は、1874（明治７）年９月24日から10月４日にかけて、日光、中禅寺を旅行する。

第三回は1877（明治10）年９月で、榛名・伊香保など北関東の山々を巡ったが、ハプニングに見舞われた。すなわち、金精峠から奥日光の湯元に下りる途中で日本人の案内人が道に迷い、サトウは野宿をしなければならなくなったのである。その日は、奇しくも彼と厚い親交のあった西郷隆盛の西南戦争が終結した日であったが、山中のサトウは知る由もない。

第四回は1880（明治13）年９月で、その後一生彼の世話をしてくれることになる本間三郎と初めて足尾と日光を登った。

ちなみに1884年３月から1887年５月の実質三年間のバンコク赴任中も、休暇を二度日本で過ごし、二度とも、日光と中禅寺を訪れた。それは1884（明治17）年11月と1886（明治19）年８月のことであった。

1.4. 日光に関する記述

このように何度も足を運んだ日光について、サトウは著書でどのように紹介しているのであろうか。

まず、*A Guide Book to Nikko* を見てみよう。この本は1872年３月に日光を訪問したときの日記と、その直後の『ジャパン・ウィークリー・メイル紙』1872年３月から４月にかけての記事をもとに、三年後の1875（明治８）年にジャパン・メイル社から発行されたもので、四十二ページというささやかな英文の日光案内書である。しかし英文のガイドブックとしては、京都案内（1873年）横浜案内（1874年）に続く三冊目であり、日光がいかに外国人の関心を引いていたかを示すものであるし、また、サトウのこの書があったから、外国人もますます日光を訪問しやすくなった。

まず、東京から日光へ到達するルートを紹介する。今市、鉢石の町々を経る。そのあと、歴史の紹介である。日光山が二荒山(ふたらやま・にっこうさん）と呼ばれていたこと、勝道上人の開山のこと、家康が東照宮権現と祀られる由緒、1868年の維新、と、一通り説明される。神橋については勝道上人の逸話が紹介されるなど、細かい。陽明門は賛美と共に忠実に描写される。オランダからの灯篭の寄贈にも言及する。拝殿・奥殿も詳しい。装飾の施された格天井に言及する。そして家光廟、家康の御墓も説明する。その後は、二荒山神社と満願寺の三仏堂についてである。当時は輪王寺が満願寺と呼ばれていたが、千手観音、阿弥陀如来、馬頭観音の名を記しながら紹介している。そして、そうめんの滝など滝がいくつか紹介され、行者堂、大日堂なども行く価値があると提示した後、いよいよ奥日光の中禅寺である。

馬返しの地点からゆっくり一時間半坂を登ると、中禅寺湖にたどり着く。ここでは、前述の日記とほぼ同じ表現を遣い、「男体山のふもと、樹々が頂きまで覆った丘に囲まれている。箱根の湖よりもずっと絵のようにうつくしい[注9)]」という。また、夏場だけ修験者と巡礼者のために、茶屋が宿屋を営業することも書かれている。さらに奥の湯元温泉には、中禅寺湖よりももっとうつくしい湖があるという。湯の湖のことである。龍頭の滝にも触れる。山岳案内も若干する。金精峠のこと、白根山のことである。まるで将来の自分のために書いているかのようである。

この著では、自分の足で確かめた情報に加え、先にも述べたとおり、文献として『日光山志』を使っているので、説話や家康公の話など、正確に記載されている。やはり、日本語が使えることの強みが十二分に発揮されている。領事担当サトウ書記官の、情報と報告書の正確さが垣間見られるような著といえよう。

続くもう一冊の旅行案内書、『中部北部日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* は、ロンドンのマレー社から、1884（明治17）年に出版された。マレー社の世界旅行シリーズの中での日本版として、記念すべきガイドブックである。つまり、世界の旅行市場に、日本が登場したのである。このガイドブックはサトウの後もチェンバレンらに引き継がれ、版を重ねていくこととなる。日本旅行書の定番となる。

この旅行書では東京から各地への旅行先を「ルート何番」と番号化して順々に紹介しているのだが、その中で、「ルート52」が、二十頁にわたり、日光とその近隣に捧げられた。[注10)] 世界への日光のデビューである。しかし、これも内容は基本的には前著と同じで、それぞれの項がさらに詳しくなり、ホテル旅館等の宿泊案内が加筆され、さらには登山情報も細かく出ている。ところで中禅寺湖については、「男体山のふもと、樹々が頂きまで覆った丘に囲まれている。」という記述が前著から引き継がれたが、残念なことに、「箱根の湖よりもずっと絵のようにうつくしい」は削除された。やはり、私的な感想とみられる文章は取り除いたのであろう。

このように、著書が本格的になるたびに、日光と中禅寺の紹介は詳細を極め、情報満載となる。写真掲載は一切なく、赤い厚手の表紙を開くと、細かい字でびっしりとその訪問地について書かれているのである。赤表紙の装訂で有名なイギリスのマレーは、黄色い表紙のドイツのベデガーと共に当時の二大双璧の旅行書であるが、その中に、日光が登場したのである。これもサトウの功績といえよう。

1.5. 旅行の意味　～屈折を癒すもの～

前節で引いた *A Guide Book to Nikko* や *A*

Handbook for Travellers in Central & Northern Japan などは、サトウの旅行を通じて得られた貴重な業績の一つに挙げられる。しかしサトウはこうした地誌研究のもとになる旅行を、その情報収集と執筆の材料発掘のためだけに為していたのであろうか。知識を得ることだけがすべてだったであろうか。管見では、むしろ逆で、旅行がまずあって、そのあとに知識や情報を得て、結果として地誌研究や業績としての書物が出来上がったように思える。

彼の日記の中に、その理由がうかがえる。『遠い崖』の筆者荻原延壽氏が述べるように、明治に入ってからのサトウは東京にいる間は日記の筆がそれほど進まず、旅行に出ると途端に筆がよく滑る。

維新直後英国に一時帰国したサトウだが、第一回の賜暇を終えて日本に戻ってみると、維新前後の八面六臂の活躍をしたあの興奮は収まり、彼自身の仕事を鑑みても新政府との交渉や、大分裂に続く西南戦争、朝鮮問題はあるとしても、何か迫力に欠ける。のちに「あの1862（文久２）年から1869（明治２）年にかけての７年間はわたしの人生で最も充実した時期でした。あのころ、私は本当に生きていましたが、」注11) と述懐する通り、あの特別の時期の後は反動が大きい。維新後の西郷の生き方とも似て、以前の緊張と高揚感は少ない。東京ではいまひとつ元気がない。

それは何故であろうか。彼の仕事が、「領事部門」の通訳生上がりの通訳書記官だからである。「外交部門」の書記官ではないからである。「領事部門」は、外交官という誇りはあるものの、外務省の在外勤務のもう一つの領域、「外交部門」に比べると、出世の道ではない。「外交部門」に所属する者は、大半が恵まれた階級出身のケンブリッジやオクスフォード卒で、この部門から大使や公使が任命される。サトウ自身は、のちに経歴の最後に日本公使と中国公使を書き加えることになるが、それは語学を含めた極東という特殊性によるもので、ヨーロッパ主要国ではありえないことである。少なくとも20歳代、30歳代の時点では、公使・大使になれるという見通しはまったくない。思えば18歳のとき、宗教的差別と階級制度のイギリスを脱出するつもりで選んだ職業が、実にイギリスそのものを反映して、ここ極東でもイギリスに突き当たっているのである。しかも、接する相手は日本という極東の新参国である。イギリスの外交官として彼らに接するとき、イギリスの威厳を保とうとするのは当然である。いわば、イギリスの衣を着なければならない。イギリスのエリート組織の中では非エリートのサトウが、イギリス人としてのエリート性を貫かなければならないのである。それが後々まで引きずる彼の心の屈折である。

そうした彼が何らかの活躍ができ、水を得た魚のように動けるのは、地誌研究という目的のために国内を調査旅行する時である。東京の外交の仕事ではなく、旅行の時である。だからこそ、第一回の賜暇のあと、先に紹介したように精力的に旅行をし、情報を明文化する。そしてそれは著書という形で残っていく。

その上、彼は富士登山の試みや中禅寺坂登攀の事実でもわかるように、大変な健脚の持ち主である。動くことは彼の性に合っている。自然に触れると心の屈折も忘れることができる。ことに日光に限って言えば、日光は山に囲まれている地であるゆえに、植物も群生し、蝶が舞うところである。明治に入ってから、サトウは、植物への興味を一層深くし、シーボルトの門下生でもあった本草学者、伊藤圭介にも教示を仰ぎ勉強をしているので、この地への旅は一層うれしかったに違いない。男体山や周辺の山を巡り、自然を観察した。それを如実に示す手紙を

ここで紹介したい。植物を介して急速に親しくなった、横浜の弁護士ディキンズに宛てたもので、1877（明治10）年９月、三回目の日光行から帰宅した時にしたためた。

> 日光や、日光に至る途中で、まだわれわれが採集していない植物にはほとんど出会いませんでした。唯一の例外は、日本人がトコワラビと呼んでいる珍しいシダ類の植物です。（…）男体山で、どちらも実をつけたブナとヤマナシの木を見つけ、標本を持ち帰りました。このほかにも、注目すべき木については､すべてそうしましたが｡(…)だれに聞いてみても、日光の場合、五月中旬が植物採集にいちばん適した時期だそうです。あなたから借りた双眼鏡は大事に持って帰りました。お礼とともにお返ししますが、非常に役に立ちました。注12)

借りた双眼鏡を使って、手の届かない植物までくまなく観察するだけでなく、採集したものは標本にして東京に持って帰り、その後も細かく調べているのである。山中だけでなく東京に帰ってからも嬉々として植物に熱中している様子が、眼に浮かぶ。

このように、旅行をして著作にまとめたり、あるいは植物の研究をしたりすることが、「領事部門」所属のサトウの心の屈折を癒してくれたのである。こうした意味で、日光という土地は、彼にとって大変魅力的な場所であり、大切な旅行訪問先であった。

しかし、幕末1862（文久２）年に来日して早や二十年近くともなると、サトウも自分の将来を考えざるを得ない。いつまでもここで通訳書記官として勤務していても、公使に昇進できる位置ではないことを知っていた。そこで、彼は人生の次の段階に進むこととなる。迂回を経ての再来日を図るのである。そして二度目の勤務の時、彼にとって日光がより魅力的な場所となる。

2. 公使アーネスト・サトウ卿と中禅寺

2.1. 迂回後の再来日まで

1882（明治15）年２月、サトウは帰国する同僚のウィリスへの感慨を日記に記す。「いろいろ考えてみたが、結局ウィリスが日本を去ったのは正しかった。かれは日本というような小さな場所で人生を浪費するのはもったいないほど、いい奴なのである。」注13)

この言葉はウィリスに向けられたと同時に、彼自身が日本で「人生を浪費する」ことに不安感をいだき、焦りを感じていることを表わしている。1862（文久２）年に通訳生として来日し、1865（慶応元）年に通訳官へ、さらに幕末の時の働きもあって明治元年には早くも日本語書記官へと、通訳としては、つまり「領事部門」としては順調に出世した。そして日本に限るという条件は付いていたが、1876（明治９）年には公使館の２等書記官に任命された。これは「外交部門」も兼務である。しかしこの先の昇進は見通しが立たぬまま、「小さな場所で人生を浪費する」ことが目に見えていた。

いよいよ自らも何とか策を講じ、イギリスの外務省の中でそれなりに昇進できる道を見つけなければならない。そこで、一度日本の外に転出して、よりマイナーな地域でともかく館長となり、その後日本の館長、つまり公使となって戻ってくるという道を取ることにした。1883(明治16）年賜暇で帰国中、タイのバンコク「駐在代表兼総領事」という空席を志願し、将来日本へ公使として戻る可能性に賭けた。「迂回」することによって日本での館長職を狙う。四十歳の選択である。こうして1884（明治17）年３月、ロンドンから日本に帰任せず、バンコク赴任と

なった。

なお、1880（明治13）年３月生まれの長男、栄太郎につづき、この最後の賜暇の間の1883（明治16）年３月に、次男、久吉が武田兼との間に誕生した。1884（明治17）年バンコクから日本への休暇来日中、家族のために、それまで住んでいた飯田町の家（現在日本歯科大学付属病院の地）の他に、富士見町に家をもう一軒整える。現在の法政大学飯田橋校舎の地である。ちなみに日記に息子たち家族のことが初めて出てくるのは、この1884（明治17）年10月６日が初めてであり、日本語通訳官２等書記官という肩書を離れてからである。日本での勤務中は、武田家のことは、同じく日本女性との間に男子のあった同僚アストンともども、お互いに本国では語らない、暗黙の了解事項としていた。

その後サトウはタイ赴任中の1885年２月、「弁理公使兼総領事」に昇進し、「領事部門」から「外交部門」への転身に成功した。これは19歳で日本語通訳生としてスタートした外交官の職歴としては、画期的なことであった。しかし、日本の公使ポストはすぐに回って来ることはなかった。1889年５月からの南米ウルグアイの弁理公使、続いて1893年８月からのモロッコ駐箚特命全権公使を経なければならなかった。前節で引用した、維新前後という「あのころ、私は本当に生きていましたが、」の後には、「いまはただ無為に日を送っているにすぎないような気がします[注11)]」という言葉がつづくのだが、それは、1893年11月２日、モロッコ駐箚の時に書いたものであった。まさに、日本の公使になるための「迂回」の途中の言葉であった。

しかしその「無為に日を送る」ことに終止符がうたれた。ようやく1895（明治28）年５月日本駐箚特命全権公使に任命され、７月28日、十二年ぶりに着任する。晴れて公使として来日することになったサトウは、来日前の６月、ヴィクトリア女王からサーの称号を授与された。アーネスト・サトウ卿として、全権公使の赴任である。五十二歳になっていた。

公使サトウ卿は、よく知りぬいた日本で、どのように過ごすのであろうか。前回の書記官時代と違うところがあるであろうか。

2.2. 中禅寺湖畔の別荘

公使である以上、館長として「外交部門」の仕事をするので、職務内容が前回と違うのは当然である。居所も、千代田区一番町の敷地内でも「一番館」の公使邸である。サトウの植えた吉野桜が現在も美しいところである。しかしもっと大きな変化は、中禅寺に別荘を建てたことである。そしてそれを弾みに、およそ在日５年の間に、31回、延べ218日、日光中禅寺を訪問したのである。

サトウが公使となって初めて日光を訪問したのは、1895（明治28）年８月20日、赴任後およそひと月たってのことであった。日記によれば、汽車で日光に着き、金谷ホテルに知人を訪ねると「お節介にも[注14)]」今夜はここに泊まるよう勧められたが断った。途中外国人仲間の家に挨拶したあと、雨の中、馬返しを夕刻６時10分に出立し、ほとんど徒歩で中禅寺に向かい、夜８時の暗くなるころ中禅寺に到着したという。この一日の文章でわかるのは、彼の中禅寺への執着である。ともかく彼は山内に興味はなく、金谷ホテルに泊まることなど全く考えていない。また、山内ではかなりの人数の外国人が滞在中であり、外国人が集っていたことも窺える。そのような混み合ったところはご免だと言わんばかりに、サトウは雨の中を徒歩で登攀し、中禅寺に一気にたどり着いた。

地元の旅館経営者伊藤浅次郎から家を一カ月借りており、８月29日まで滞在した。旅館でもなく、貸家を手配しておいたところが、サトウ

の中禅寺での過ごし方を象徴している。つまり、中禅寺での自由な長期滞在を念頭においていたのである。しかし中禅寺湖から華厳の滝への流路口、大尻（おおじり）近くにあったこの家は「小さくて、あまり快適とは言えない[注14)]」と、この最初の日から感じていた。

そこで、翌年、自ら別荘を建てることにした。湖の東側で、大尻から南に30分ほど湖畔沿いに歩いた砥沢（とざわ）というところに土地を借り、２階建ての木造の家を建てることにした。この家は彼の帰国後、英国大使館中禅寺別荘として多くの館員が過ごすことになる建物である。もちろんボートハウスもしつらえた。1896（明治29）年５月末の日記から引用してみたい。

> ５月29日
> ９時の汽車で出発。中禅寺に行き、米屋に泊まる。峠を登る途中、３時半ごろから雨が降ってきた。
> ５月30日
> 素晴らしい朝だ。コンダーと家の敷地へ行って、ボートハウスの位置を決め、家の裏手から丘の方へ伸びている小道を歩く。敷地の前は広げられるように三段のテラスを作ることにする。白や赤や薄紅色のつつじが咲いていた。峠を下った日光の谷の辺りでは、藤が咲いていた。三時間半で駅まで歩き、４時40分の汽車で東京まで戻る。[注15)]

金曜と土曜の一泊二日の日程で中禅寺へ行ったが、同行したのは、鹿鳴館の設計で有名なイギリスの建築家で、日本ではコンドルと呼ばれているジョサイア・コンダーである。今回サトウは友人でもあるコンダーに設計を依頼した。[注16)] 建築中の家の敷地でボートハウスの位置を決め、テラス設置も指示する。雨上がりの朝、空も湖も丘の小道も美しく、彼の浮き浮きとした様子が伝わってくる。ボートは他の別荘を訪問する交通の手段として必須であるので、これからの生活が具体的に見えてきて嬉しい瞬間である。帰り道の花々も祝福してくれているようである。

そして彼は建築が完了しないうちから住み始めたようであり、７月15日の日記によれば、

> （…）雨が強く降っていたのでラウザーと昼食をするのをあきらめて、まっすぐ家に行った。家の中はひどく散らかっている。しかし夕食までには、奇麗に片付いた。居間、食堂、二階の二部屋に障子がはまり、階段も出来て、残りの建具も届いた。[注17)]

とある。そしてこの夏から、念願の別荘生活を始める。

2.3. 社交と散歩

では、この中禅寺でのサトウの生活はどんなものであったのであろうか。それは、外国人仲間たちとの社交と散歩であった。

まず社交であるが、サトウは別荘が完成するかしないかのうちに、もう友人を家に招いて泊めている。前節で引用した「障子がはまり、階段も出来て、残りの建具も届いた[注17)]」途端の８月1日に、あの有名な女性旅行家、旧姓イザベラ・バードこと、ビショップ夫人[注18)]が来ている。彼自身は前の日、東京から駆けつけた。同時に大きなボートも到着しており、大変満足げである。そして、早速このボートを漕いで友人と往来を始める。たとえば、こんな具合である。

> ８月5日
> ビショップ夫人と一緒にダヌタン家へ昼食に行くと、ウォルター夫人とフレイザー夫人も来ていた。彼ら全員を誘って、うちで

お茶にする。そのあとでラウザーとカロと一緒にボートに帆を張って、カロの家の方向に走らせた。注19)

ダヌタンは、駐日ベルギー公使で、在京の外交団の団長も務めるほどの外交団の重鎮である。夫人がイギリス人でしかも中禅寺を気に入っていたこともあり、サトウはダヌタン夫妻と親しく交際した。カロはスペイン大使館の書記官である。ランチ、お茶、ボート漕ぎが一日の間に盛り込まれているが、それが当然のごとくに、さらっと記している。外交官の付き合いとはまさにこういうものであることを示している。そして一日中ボートに乗って、湖畔を探検することもあった。

次に特筆すべきは自然を観察しながらの散歩である。日光駅から奥日光の中禅寺まで難なく歩き遂げてしまうことから、彼の健脚ぶりは若い日々と同様に健在である。そして、植物を愛する心も相変わらない。中禅寺坂を昇降するとき、湖畔近辺を歩くとき、ボートに乗るとき、日記には植物を愛でる描写が多い。しかし、社交に時間がとられるのと、年齢のこともあってか、彼の登山の回数自体は多くはない。

登山としては、タイ在任中に休暇で日光を訪れた1884（明治17）年の11月に女峰山に登っている。このたび公使として赴任して、初めて山へ出かけたのは、別荘に住み始めた年の秋、1896（明治29）年10月11日（日）であった。

朝八時の気温は40度。夜のうちに吹いた強い北西の風が雲を吹き払った。午前中に足尾の方向が見える峠まで登り、富士山を見た。白根の頂上は雪が降っているのかほとんどぼんやりとしか見えなかった。午後2時に日光に向かって、下山する。裏見の滝に回って20分ほど休み、日光に５時20分に着いた。注20)

前の日に紅葉がすばらしい眺めだと感動したものの、朝は冷え込み、足尾方面まで見える峠に登って、富士山を眺めやって満足するにとどまった。白根山をアタックすることもない。しかしそのあと徒歩で下山し、日光駅に夕方には到着するのだから、それが登山代わりといえよう。

あるいは1898（明治31）年７月12日には、大真名子山から太郎山にかけて縦走している。そして蘭、百合、すみれ、岩かがみの花々に目をとめる。注21) 幾つかは採集して、自分の庭に植えている。このように、健脚ぶりと植物への情熱は相変わらずである。

さらにアーネスト・サトウの登山への情熱は、次男武田久吉に受け継がれた。ちょうどこの公使時代も終わりにさしかかる1899（明治32）年に、サトウは自分の別荘とは別に武田家のために日光に別荘を建て、おかげで十代の少年二人は山に親しむことが出来た。ことに久吉は、本草学、植物学、自然保護に関心をいだき帝国大学農科大学の白井光太郎に私淑していたのだが、日光の別荘を得ることにより、将来の道を定めた。すなわち、植物学博士となり、日本山岳会の創立者の一人となるのである。

このように二回目の滞在は、サトウが武田家のことを考えた日々でもあった。それは彼の生き方が安定したからである。

2.4. 英国紳士として、父として

公使となったサトウの精神状態は、通訳生から始まった前回の時と比べると、大分落ち着きがみられる。それはもちろん年齢を重ねているし、館長の立場であるからである。しかし、外交部門の外交官という、まさにイギリス紳士として自他ともに認める地位になれたことが、最

大の理由であろう。

すなわち、前回は領事部門の日本語を専門とする書記官であったし、さらに非国教徒のユニヴァーシティ・カレッジ卒という出自そのものへのコンプレックスもあった。本当はそうしたイギリス階級社会から抜け出すために外交官という職を選び東洋に来たはずなのに、その東洋で、またイギリス社会の典型的な壁に突きあたった。ゆえに日本国内の調査を名目に、旅と植物採集に喜びを見つけて、ささやかに気晴らしをする以外に焦りは癒されないという複雑な心境であった。

しかし今回の赴任は違った。外交部門のトップの館長である。彼は外交官として貢献があったものに授けられる、KCMG （Knight Commander of St. Michael and St. George は、イギリス連邦および植民地での功績を認められた外交官に与えられる勲章）のサーの称号を、ヴィクトリア女王から授与された公使である。身分が安定している。しかも、特筆すべきは、英国国教徒となっていることである。

最初の滞日中、キリスト教への関心が薄かったサトウは、神道について研究を深め、論文も多々発表している。しかし、タイから直接日本に赴任できないことが判明した直後の1888（明治21）年、１月から４月にかけてローマやリスボンを旅行中、キリシタン関係の資料を図書館で調べ、英国へ帰国後『日本耶蘇会刊行書誌』を私家版で出版した。そして同じ年の７月、自分の意思で初めて教会へ行き、10月、セント・ポール寺院で英国国教会の堅信礼拝を受けた。回心である。ちなみに、日本の家族も続けて日本で洗礼を受けている。もちろん、彼自身の宗教心から、非国教徒から英国国教徒に回心したのであろう。また国教徒となったからといって、すぐに出世の道が思うように開けるわけではないし、事実、念願の日本公使になる前に、ウルグアイとモロッコの二か所を経なければならなかった。しかしとりあえずこれでイギリス社会の本流となり、外交部門の外交官のルートに乗る条件を備えることになった。したがって、1895（明治28）年の来日時には、宗教的なコンプレックスからも解放され、安定した精神状態を保持できたといえよう。その結果、安心してサトウ卿という英国紳士となる。

館長のサトウは当然、英国紳士の代表としてイギリス流を貫く。

国教徒としてだけでなく、平素の振る舞いも、社交とスポーツも、英国紳士流である。仕事の勤勉さ、厳密な時間感覚、そして、片や英国はじめ在日外国人との親密な交流と、片や日本人との節度のある付き合いとに、その英国風は表れている。日記を書くに際しても、若き日と同じく慎重である。

その慎重さがもっともよく表れているのは、武田の家族に対するものである。日記の文章も言葉も選ぶ。長男栄太郎は「E」であり、次男久吉は「H」であるし、武田兼はお兼だから、「O・K」である。彼らの家も「富士見町」あるいは、郊外の別荘は「源兵衛村」または「戸塚村」と、場所のみを記す。

別荘であり、私的な場所であるはずの日光中禅寺での記述でも、その慎重さは、変わらない。この公使時代の中禅寺では、家族との交流は東京よりも少し気を楽にしてなされたのだが、日記には一切登場しない。たとえば、1898（明治31）年の夏、サトウは７月10日から９月21日まで、数回東京の用事を足しに帰京した以外は、ほとんど中禅寺の別荘に滞在し、植物採集とボート漕ぎと社交を楽しんでいたのだが、その理由の一つには、日光山内の輪王寺の塔頭の一つである「浄土院」に、次男久吉が滞在していたからである。15歳の久吉は山と植物に興味を深めた時期で、８月には、兄栄太郎とともに、

女峰山・大真名子山・男体山の「三山がけ」もした。しかしサトウの日記には、「８月19日浄土院を訪れる[注22)]」と記すだけである。

しかしこの慎重さを批判することはできない。これは当時の英国流としてはごく当然のことであった。逆に、たとえば、日本人小泉節と結婚して、その後帰化した小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、例外中の例外であり、むしろ、在日の外国人たちからは半ば驚かれたり、忠告を受けたりしていた。サトウの場合、父として「源兵衛村」や「富士見町」で夕食を共にしたり、長男が立教専修学校から外国語学校に転校する際には立教のロイド校長に挨拶に行ったり[注23)]、「浄土院を訪れたり」、日光に武田の家を1200円出して購入したりしたところに、公使時代の精神的安定を得た結果としての、サトウの父親らしさが見てとれる。こうした動きは、まだ若くて先行きが不安であった前回の書記官時代には見られない。ことに今回の日光では東京という仕事場を離れた場所だからこそ、親心を示すことが出来たのである。

ちなみに彼の日記に、久吉との日光行きと登山が詳述されるのは、彼が最後に日本を訪れた時の1906（明治39）年である。サトウは５月に中国清国公使を離任し、本国へ戻る途中に日本に寄ったのだが、乗船する船の食中毒検疫のため出航予定が１週間遅れたので、急きょ、久吉と日光へ行くことになったのである。まさに天が与えてくれた、二人の日光行きである。すでに離任しているという安心さからか、この日光行きの記述は楽しげに書かれている。

> ５月31日　久吉と十時半の汽車で日光へ行く。（…）我々はすぐに稲荷川のふちの仏石に最近出来た高山植物園を見に行った。瓔珞つつじが咲いている。大きなヒースに似た花で、薄い赤みを帯びた萼がついている。（…）
>
> ６月３日（日）　久吉を連れて金精峠の方へ少し歩く。それから湯滝（ゆのたき）の上まで行って戻る。久吉は頂上まで行って、酢木（すのき）と花の咲いた猩々袴（しょうじょうばかま）や白いアネモネを見つけた。
>
> １時半に出発し、菖蒲の浜の茶屋までゆっくり歩いて１時間35分で着いた。（…）[注24)]

このとき、父サトウは62歳、次男久吉は23歳であった。かつてサトウが通訳生として来日して幕末維新の全国各地を飛び回っていた年齢に、息子はなっていたのである。自分は金精峠の途中まででとどまり、息子だけが登頂して自分の代わりに高山植物を見つけたことを日記に書く。息子の登っていく後ろ姿を眼を細めながら見やる、初老の父の姿が目に浮かぶではないか。

このように防備をほどいて息子久吉のことが書けるのは、公使時代からさらに数年先のことであった。しかし公使時代も、周囲に気を遣いながらではあったが、英国紳士と父親と、どちらの役割も貫こうとした。そしてその際中禅寺湖畔一帯は、東京を離れた場所の提供と、山と植物という親子共通の生きがいの提供という意味で、重要な役割を演じた。

おわりに　～ 帰国後 ～

日本、さらに中国駐箚特命全権公使を歴任して1906（明治39）年７月に帰国したサトウは、同じ年の10月に外交官を引退した。まだ63歳であった。86歳でオタリー・セント・メリーにて天寿を全うするまで、その後の長い余生23年間を、どのように過ごしたのか。ことにこれだけ長く付き合い、妻子もいる日本との絆を絶やさないようにしていたのか。興味の尽きないことである。

結論からいえば、彼は日本を卒業し、イギリス紳士として本流に戻っていった。

日本との別れは、第一回目の離任時に始まっていた。たとえば、日本語の蔵書の一部を整理し大英博物館に売却したり、盟友勝海舟からの刀を手放したり、富士見町の家の購入など日本の家族への財産上の配慮を行ったりしていた。さらに英国での資格取得に熱心で、1887年に法廷弁護士資格試験に首席で合格し、翌年にはすでに述べたように英国国教会の堅信礼を受けた。回心である。

叙勲の面でも、日本赴任の直前の1895（明治28）年にヴィクトリア女王からKCMGを得てサーとなり、清国駐箚中は1905（明治38）年1月にエドワード国王からGCMG（Knight Grand Cross of St. Michael and St. Georgeというナイトの最高勲章）を得るばかりか、日本政府からは1906（明治39）年勲一等旭日章を授与された。日英両国から外交官としては最高の叙勲を受けた。

学位に関しては、退官後ではあるが、ケンブリッジ大学から法学博士の名誉学位を1903（明治36）年の9月に、オックスフォード大学から同じく法学博士の名誉学位を1908（明治41）年に授与された。若い日々に入学すらできなかった大学二つから、名誉学位を授けられたのである。いかばかりの感慨であろうか。仕事としては外交官を退職した1906年、ハーグの国際仲裁裁判所の英国代表に任命され6年間在職し、翌年からは治安判事にも任命された。

このように、叙勲と学位と仕事に関して言えば、まさに英国の本流である。若い日々に感じたようなコンプレックスや焦りはどこにもない。

そうなると、意識的に日本を捨て去る。「日本の専門家」という立場は限られた分野なので、なるべく抑えるようになる。親しい元同僚のアストンが生涯日本研究を続けたのとは対照的に、日本の轍から抜け出そうとする。アストンは帰国後も『日本書紀』の英訳（1896年）をはじめ、『日本文学史』（1899年）や『神道』（1905年）を出版した。しかしサトウは、所有した日本の書物に関していえば、順次アストンやチェンバレンに譲り、また大英博物館、ロンドン大学やケンブリッジ大学に寄贈し売却した。そのあと1913（大正2）年には手元に残っていたすべての日本関係の蔵書を、サザビースを介して売却した。ゆえに出版する本は日本関係の書ではなく、たとえば『外交実務案内』（1917年）という外交全般的なものであった。ちなみにこの『外交実務案内』は本人の言葉によれば「じつに良く売れ[注25)]」た。没後も版を重ね、1979年に改訂第5版が出版されている。まさに日本の専門家にとどまるものではないという宣言であり、領事部門出身の痕跡をぬぐおうという決意と思われるほどである。また読書は原語の『戦争と平和』、サント・ブーヴ、ゲーテ、メッテルニヒとつづき、ヨーロッパの古典を中心としており、日本語の書はほとんど読まなかったという。

こうして着々と正真正銘の英国紳士の完成に近づく。チェンバレンが日本を離れるときに清国駐箚公使のサトウに向けて書いた、「植民地生活の錆をこすりおとし、手遅れにならないうちに物の見方を調整したいのです[注26)]」という有名な文章を思い浮かべるが、まさに同じ心境であったといえよう。

しかし例外として挙げられるのが、植物への愛着と久吉の存在である。

『遠い崖』の著者、萩原延壽氏によれば、サトウが晩年を過ごした家には庭があり、氏が訪ねた時も日本の笹の茂みも吉野桜も健在であった。サトウの日記や手紙によれば、日本から種や苗木を取り寄せて自ら植え育てていた。その取り寄せ注文の相手は、次男久吉であった。「日本で過ごした長い年月を思い出させてくれるので、私は自分の庭のために出来るだけ多くの日本の植物を手に入れたいと思う。（1907年10月

30日付）[注27]」という手紙に答えて、久吉は種と苗を送ったに違いない。父はそれらを庭に植えて育てた。ときには日本のキュウリが食卓を楽しませ、青森のリンゴも懐かしかった。野菜果物だけでなく、もちろん花々も咲いたことであろう。とりわけ、庭のほぼ中央にある吉野桜は、氏が訪れた時も豊かに葉をつけていた。思い出すのは千代田区の英国大使館前の桜並木である。日記に“cherry tree”ではなく“The Yoshinozakura”と記す通り、愛着のある「吉野桜」である。これらは1898（明治31）年にサトウが植え、翌年にもう一度50円を支払って手入れの植え替えをした桜である。[注28] 1899（明治32）年５月中禅寺の坂でも美しい桜を見かけて日記に記していたサトウであるから、桜への思いは特別なものがあった。

また、植物の注文相手でもあった久吉は、英国留学の後日本に帰国して理学博士の学位を得るなど、着々と学者の道を歩んでいた。そして1921（大正10）年に結婚して女の子を授かると、サトウは、孫を見たいがこの年齢では日本に行けない、娘が３歳になったら連れて来ないか、と書き送っている。[注29] 日本の武田家以外には、生涯妻子を持たなかったサトウであるし、アメリカで牧場を経営していた長男栄太郎に病没で先立たれていれば一層、兼のそばにいる久吉の存在は大きかった。久吉は日光中禅寺で登山と植物学の道に開眼したので、サトウにとってこの次男は、自分が大切にしてきた道をそのまま辿って歩いていると見えたに違いない。

この例外二つ――植物と自分の後継者久吉――へのきっかけとなったのは、日光である。山と植物と湖と別荘をサトウに与えてくれた日光の存在なくして、サトウの日本の思い出は長く残ることはなかった。日光は気晴らしや気分転換の場所以上の、もっと長い時間にわたって続く、彼の心と体の支えとなるものを与えてくれた場所であった。

雪の残る坂を登攀し初めて踏み入った奥日光。修験者の聖地、男体山のふもとに輝く「絵のようにうつくしい」中禅寺湖。春の桜、つつじといった樹々の花々。夏の百合、岩かがみ、キンポウゲにすみれといった高山植物。秋のまばゆい紅葉。ボートを漕いでの湖畔探検。外国人仲間と語らい、食事をする別荘の日々。そして時には武田家とも自然の中で交流できる親子の実感。

勲一等旭日章の誇りとは異なる輝きを、日光中禅寺はサトウの心に残してくれたに違いない。

注

1）本稿でのサトウの伝記的な記述は、おもに、萩原延壽著『遠い崖』（朝日新聞社、1998～2001年）、イアン・C・ラックストン著、長岡祥三・関口英男訳『アーネスト・サトウの生涯』（雄松堂、2003年）、B・M・アレン著、庄田元男訳『アーネスト・サトウ伝』（平凡社、2001年）、尾田啓一「アーネスト・サトウと武田久吉の日光」（『続日光近代学事始』随想舎、2004年に所収）に、拠る。

2）Sir Ernest Mason Satow, *A Diplomat in Japan*（London, Seeley, Services & Co, 1921), p. 17.　以下 *Diplomat* と略記。

3）*Diplomat*, p. 20.

4）萩原延壽『遠い崖　9』（朝日新聞社、2000年）137頁。（以下、同書１～14は『遠い崖』と記す。）

5）B・H チェンバレン著、楠家重敏訳『チェンバレンの明治旅行案内』（人物往来社、昭和63年）、222頁。

6）B・H チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌　1』（平凡社、1987年）、56頁。

7）『遠い崖　9』、151頁。

8）Ernest Mason Satow, *A Guide Book to*

Nikko,（Yokohama, 1875）（Edition Synapse, 1999）, p. 42.

9）*A Guide Book to Nikko,* p. 33.（尚、文中は拙訳。）

10） Ernest Mason Satow and Lieutenant A. G. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan,*（John Murray, London 1884）（Edition Synapse, 1999）, p. 440 ～ 460.（尚、文中は拙訳。）

11）『遠い崖　10』、135頁。

12）『遠い崖　13』、336頁、362頁。

13）『遠い崖　14』、156頁。

14）*The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo*（*1895―1900*）, Edited and annotated by Ian Ruxton,（Edition Synapse, 2003）, p. 17―18.（以下、*Diaries* と略記。尚、文中は拙訳。）

15）*Diaries*, p. 99.

16）コンドルは、鹿鳴館、三菱の開東閣、三井倶楽部等の洋館設計と違い、サトウのために湖畔に、部屋数は多いが普通の日本家屋を設計した。この別荘にサトウは武田の家族を迎えることもあったといわれている。前駐日英国大使夫人フライ豊子「日光と英国、アーネスト・サトウ公使の桜」『大日光』第78号（日光東照宮、平成20年）９頁。

17）*Diaries*, p. 112. ラウザーはサトウ着任まで代理公使を務めていた、一等書記官である。

18）イザベラ・バードは結婚しビショップ夫人となったが、夫と死別後、明治27年から30年にかけて中国・韓国・日本を旅行し、避暑に日光にも滞在していた。サトウとは中禅寺近辺での交友仲間であった。

19）*Diaries*, p. 114. ウオルター夫人は貿易会社副支配人夫人である。

20）*Diaries*, p. 126. 尚、40度とは華氏40度で、摂氏約２度である。

21）*Diaries*, p. 459.

22）*Diaries*, p. 148.

23）*Diaries*, p. 370.

24）長岡祥三、福永郁雄訳『アーネスト・サトウ公使日記』Ⅱ（新人物往来社、1991年）、「付録（24）」、402―403頁。

25）『遠い崖　１』、67頁。

26）楠家重敏『ネズミはまだ生きている』（雄松堂、1986年）、518頁。

27）『遠い崖　１』、59頁。

28）*Diaries*, p. 349, p. 351.

29）『遠い崖　１』、63、64頁。